

第1553回（9月25日）

農村研究の理論的課題

——農耕社会論からみた

日本のムラ——

（日本女子大学）新 保 満

研究者の問題意識は、その人の体験に深く根ざしていることが多い。私（新保）の場合、少年期までを過ごした中国における日ソ両軍隊の蛮行と、不動と信じた日本帝国のあっけない瓦解から受けた衝撃である。私の研究が社会変動に関心を向けた背景には、そうした原体験がある。ところで、学問にとって最も大切なものは何かという問いに、マルクス経済学の重鎮であった向坂逸郎は、「イマジネーションだ」と答えている。では、イマジネーションは如何にして獲得できるのか？ それは、①現象の丁寧な調査・観察と、②自分を相対化してみる比較の視点により可能になる、と私は考える。

さて、社会学界では、3つの理論的な潮流が認められている。コンセンサス・モデル、葛藤モデル、象徴的相互作用モデルである。パーソンズを中心とする構造機能分析はコンセンサス・モデルに属し、私（新保）もこの立場にたっている。その基本的概念は、社会はシステムであり、内部に固有の構造と機能を持ち、外部の環境と相互に関連しつつ存続してゆく、ということである。研究方法としては、諸概念を明確に定義・仕分けて、相互の因果関係を設定し、その妥当性を検証する。農耕社会については、外生変数である技術革新が経済成長を生み、農耕社会構造の変動をもたらしている、とみる。

農耕社会の歴史的な位置づけに関して、Gerhard Lenski は、狩猟社会、園耕社会（鋤段階）、農耕社会（犁段階）、産業社会という4段階を提唱した。そして、農耕社会の後期には既に鉄製農具による富の蓄積が可能となり、軍隊、官僚、法体系も整備されてきている。

この社会が安定するための要件は権力の安定であり、王制はそれに適合的な形態だった。長子相続制が領土の分裂を防ぎ、権力の不変性を保障したからである。

農耕社会の一般的性格は、土地との関わりにおいて人々が暮らしているということであろう。様々な習慣に織りなされた社会関係の基底にある人間と大地との関係を社会学は明確にする必要がある。従来の経済学や社会学は、資源の希少性と行動の合理性を前提として構築されているが、後者（合理的行動という前提）は再考されるべきだ、と思う。私自身を含めて、社会学徒は現代社会の変動に目を奪われて、不変なものに関心を払わない傾向があった。だが、そうした不変なものを見据えることによって、現代社会を基底において支える社会構造を新たな視角から捉え直すことが出来るのではないか。比較的変動を受けにくい「イエやムラ」を対象とする農村社会論の今日的意義もそこに見出すことができる、と考える。

（文責・相川良彦）